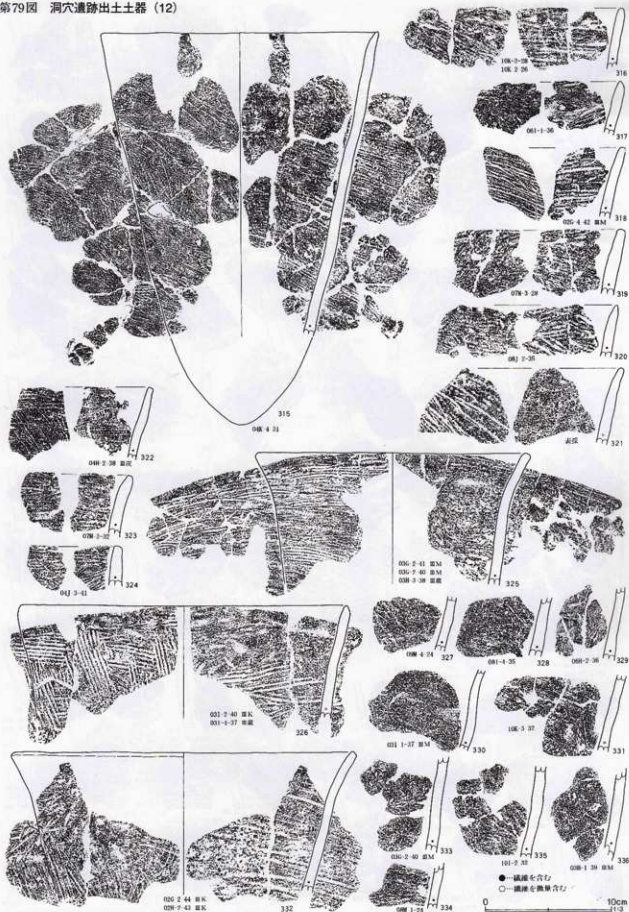
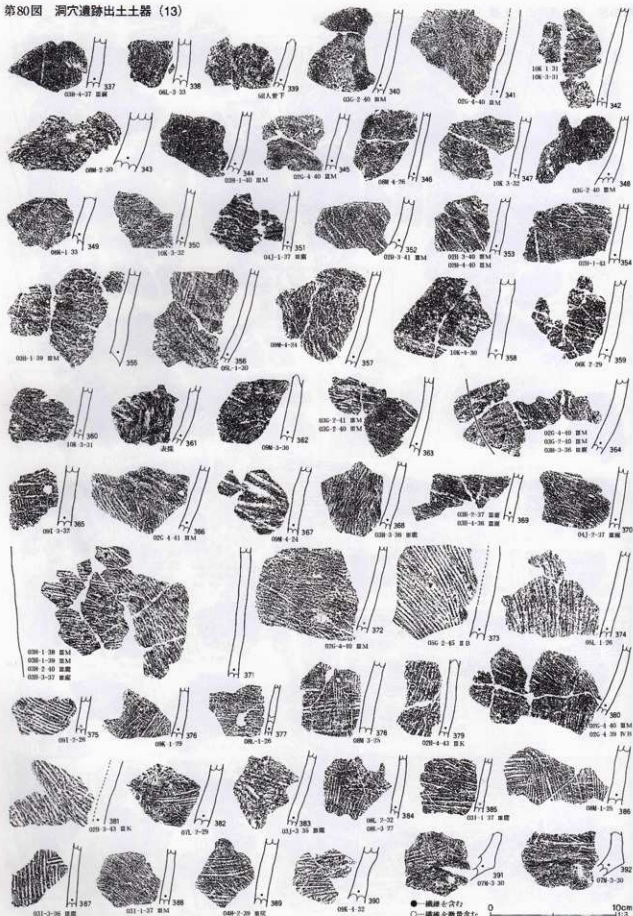


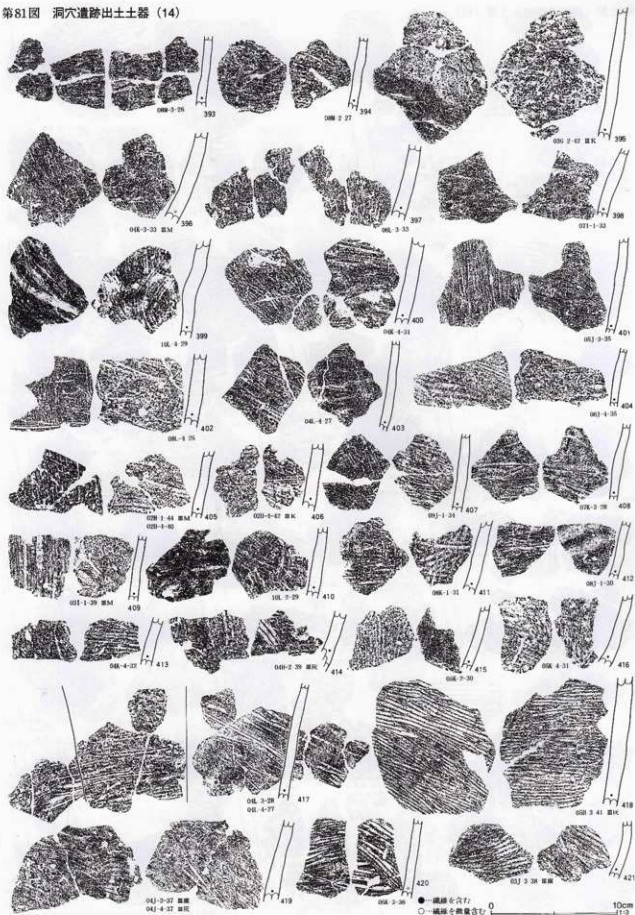
第79図 洞穴遺跡出土土器 (12)



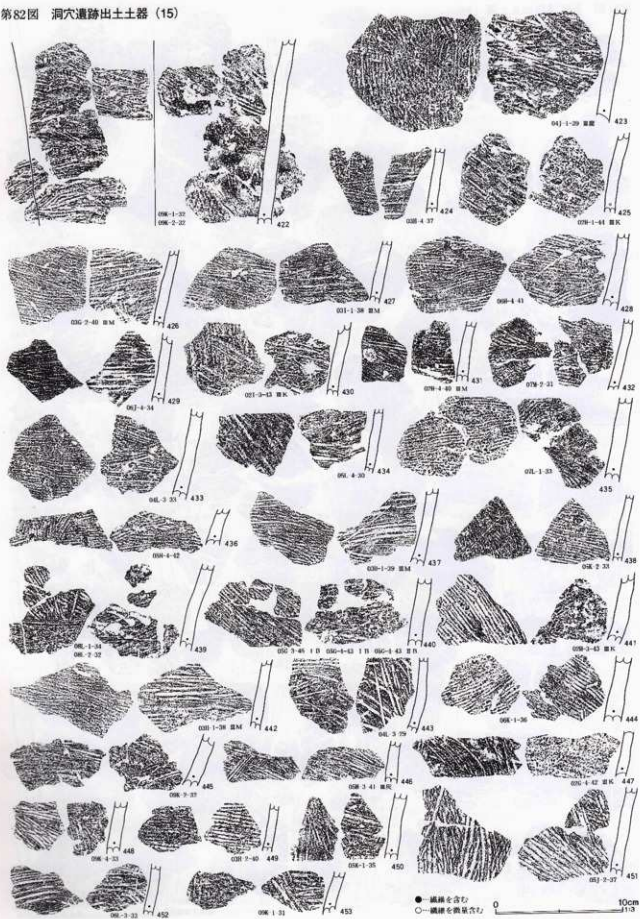
第80图 洞穴遺跡出土土器 (13)



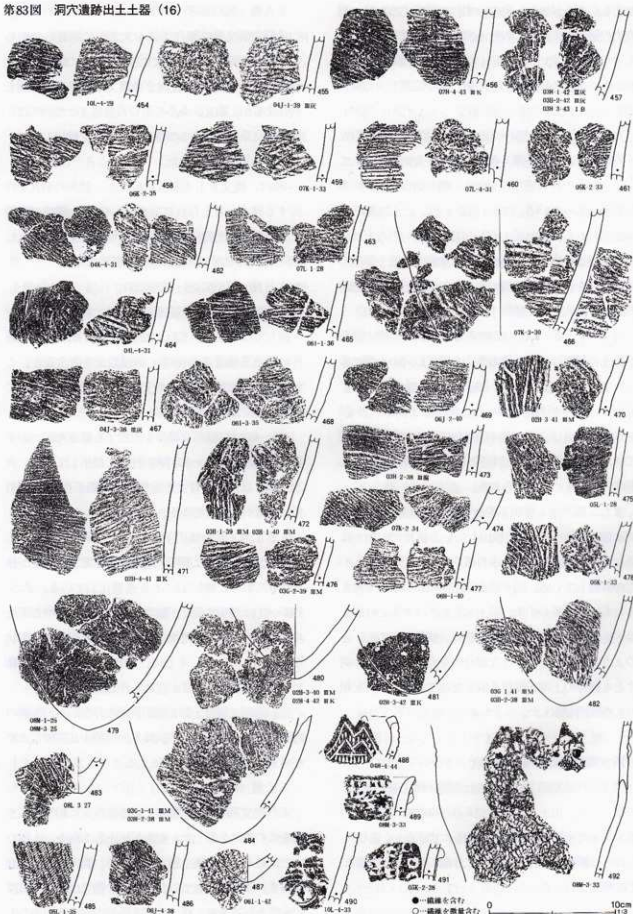
第81图 洞穴遺跡出土土器 (14)



第82圖 洞穴遺跡出土土器 (15)



第83図 洞穴遺跡出土土器 (16)



合するか否か、また、そのいずれに対応するかは、洞穴内の層位や前庭部における出土高の高低を援用してもその基準は見いだせない。しかし、器面の極端な特徴から、おぼろげながらその製作期が推測できる資料もいくつかある。

たとえば、324・358・418・428・435・444・474などの破片は、器壁が厚く条痕文も深く全面に施されている。胎土の砂質感などを含め、鶺鴒ヶ島台式土器に多い質感をもっている。また、420・452、そして同一個体と思われる424・426・427・431・442・471などは、有文土器こそ出土していないが、条痕の特徴や器壁の厚さなどを担当者の認識で考えあわせると、大宮台地周辺の野島式土器に類似する。

さらに、451・470・478にみる幅の広い条痕と脆弱な胎土の質感は、いわゆる茅山層式以降の土器に多い。加えて、373・381は、胎土に繊維を大量に含み、裏面の大部分が剥落している。剥落をまぬがれた436を加え、条痕は全面に深く印されている。段階は特定できないが、条痕文系でも茅山下層式以降の後半期に製作されたものと考えられる。

また、器形でも解釈不能な資料が2点ある。391・392はおなじブロックで検出している破片で、胎土は異なるが、曖昧な条痕のみの破片で著しい屈曲をもつ点が共通している。鶺鴒ヶ島台式土器の類似部とも考えられるが、条痕の手法、胎土ともあてはまるとは思えない。底部にしては据わりが悪く、結局のところ、どのような器種のどのような部分か見当がつかない。両片とも破片の先端が輪痕み痕となっており、これを頼りに断面図を示した。

5類 (第83図485～第84図510)

縄文時代前期前半に製作された羽状縄文系土器をこの類とした。出土量は全体で95点と少なく、分類が可能であった土器の約3%を占めるにすぎない。さらに、これらは断絶期をはさむ三期に分離でき、その時期ごとに種別を行った。

5 A種 (第83図485～487)

早期条痕文系の製作手法を大まかに踏襲しながらも、器面に縄文などを施文する一群をこの種とした。西関東での実態は、278など条痕文系最終末の土器と共存するが、縄文、そしてその代替施文については、羽状縄文系の初頭として扱った。10点を検出したが、このうち3点を図示した。

485は、縄文Rを斜位に回転し、鋭角の羽状を作出する構成と考えられる。また、486は、縄文の代替として貝殻背瓦痕文を押し込んでいる。そして、487は、485と別個体ながら、同構成の尖底部である。

5 B種 (第83図488～第84図500)

羽状縄文系のうち、広義の関山式に相当する土器を一括してこの種にあてた。22点を検出したが、出土破片にみる文様要素の出現・継続期を考慮すると、これらは限られた時期のものではなく、関山式全般にわたっているようである。

488～492は口縁部文様帯を設定する構成だが、いずれも主たる文様は一本引きの沈線が描出している。点状文様には円形竹管文と貼付文の二種が存在し、491では両者が同居している。

これに対し、493以下は縄文施文のみが観察できる破片で、493～497は環部末端付きの単節羽状縄文が施文されており、494ではこれが多段化している。また、498・499は異条斜縄文が施され、前者はいくつかの正反の合、後者は順方向附加条原体を単節と組合せ、羽状を作り出している。そして、500は組紐の組違ひ原体による疑似異節の施文が認められる。

有口縁部文様帯土器と疑似異節の存在から、本種の時間幅はいくつかの二ツ木式後半から関山Ⅱ式後半までが考えられる。

5 C種 (第84図501～510)

羽状縄文系のうち、関東でいう黒浜式に相当する土器をこの種に分類した。63点が出土しており、5類の中では最も多い。前二種とおなじく、洞穴内から前庭部雨垂れ下に集中していたが、この種では前庭部南西にも分布が拡大し、後の竹管文系期の前庭部使用の先

駆けともなっている。

唯一工具文が残るのが501で、爪形間を磨り消す削付区画によって下位縄文の枠状文を構成すると考えられる。502～509は、粗雑な縄文のみが印されており、502が無節である他は0段2条の単節原体が転がされている。また、510は、成形時の器面をそのままに残す無文土器である。

6類 (第84図511～第85図579)

縄文時代前期後半に製作された竹管文系土器をこの類とした。妙音寺洞穴遺跡では条痕文系土器に次ぐ出土量があり、総計で535点が出土した。しかし、分類可能な土器の中では約15%に達するにすぎず、器形を復元できる資料も限られている。

平面的な分布は、大きく洞穴中央と前庭部兩垂れ下、そして9 Mグリッド付近の前庭部南西隅の三個所に集中する。だが、すべてが継続するわけではなく、細時期で異同がある。

これらは、主として文様構成をもとに7種に細分類した。たとえば、浮線文土器を分類した6 E種は、細分類そのものが竹管文系内の特定の時期と符合するものだが、横位平行沈線をもとに分類した6 C種などは複数期にわたる所産が混合している。また、縄文のみのものでは、諸磯 a から c 式に共伴する個体が識別できる。そして、無文破片は、時期の特定が難しいが、多くが浅鉢の一部となると考えられ、諸磯 b 期を主体とすると考えられる。

6 A 種 (第84図511～517)

朝顔形に大きく開く平縁部の下に波状文や肋骨文を施す文様帯を設定するものをこの種とした。30点が出土したが、このうち28点が調査区南西の7～9 Mグリッドでまとまって出土している。514～517に示したごとく、たとえば波状文でも複数の個体が存在している。同一個体の散乱が点数を水増した状態とは異なり、同時期の集中区と見なすことができる。

511～513は肋骨文、514～517は波状・山形文がみられるが、516・517は連続刺突による縦位区画が設けら

れ、肋骨文からの変移の過程をものがたる。これに対し、514・515は不均等な山形と化し、前者では文様帯内の地文縄文が磨り消されずに残っている。

また、527～529は、集合化した横位沈線の特徴に6 C種と分類したが、文様帯幅が縮小するものの、構成の系統は波状文と同列であり、出土位置からみても、この種に含めた方が妥当であったかもしれない。

6 B 種 (第84図518～525)

爪形文によって主文様を描き出すもの一般をこの種とした。39点が出土したが、6 A種のような分布集中はない。文様構成の系列は複数あり、なかには全体の構成が推し量れないものもある。

518～521の同一個体片は、平縁に数単位の双頂突起を設け、文様帯には粗間隔の爪形文で横位に展開する鋸歯文を描くようだが、半然としない。胎土には石英砂が大量に混入され、硬い質感をかもし出している。また、524は、522・523の一般的なC字爪形ではなく、角押に類する刺突を連続させる。そして、525は、意図的な縄文地に横位の爪形列を並列させる。

6 C 種 (第84図526～537)

横位の平行沈線文を施すものを一括したが、6 A種の記載でも示したとおり、全63点の中に諸磯 a・b 式が混じり合う紛らわしい分類となってしまった。前述の波状・山形文系列に対し、531・534～537は、b 式キャリパー形土器の一部となるだろう。また、他の3点は、b 式前半の沈線や木の葉文系列の個体の一部と考えられる。

6 D 種 (第84図538～543)

縦位の平行沈線文を施すものをこの種とした。10点を分類したが、主として諸磯 c 式を念頭に置いたため、口縁直下のつまみ上げ列のみで縦位沈線の観察できない538もこの分類に加えている。

6 E 種 (第84図544・545)

浮線文を貼付する個体を分類した。出土はわずか7点だが、洞穴奥のみに集中して出土している。図に示した544・545はいずれも典型的なキャリパー形浮線文土器の一部と考えられる。

第84图 洞穴遺跡出土土器 (17)



6 F種 (第85図546~577)

遺存する破片内で縄文のみが観察できるものをまとめた。317点が出土したが、口縁部片の少なから想像しても、6 AからC種までの胴部破片であることも十分に考えられる。

図示した32点のうち、546~571は胎土の質感や縄文の特徴から、諸磯 a 式の有文土器に伴うものと考えられる。原体は R L の比率が高く、567~570は1段2条を不均等に燃ることによって附加条原体と類似する効果をめざしている。

これに対し、572~574はキャリパー形の器形と波頂様の突起を設けることから、諸磯 b 式の有文土器に伴うものと考えられる。572に貼付された突起の左下では、斜縄文の施文境を目安に原体0段多条の原体が追加施文されている。

一方、575・577は同一個体で、576とともに、第一種結束原体を用意し、羽状縄文を構成している。胎土と成形時の凹凸が残る器面、第一種結束原体を使用することから、諸磯 c 式期、あるいは前期末葉に製作されたものと判断できる。

6 G種 (第85図578・579)

無文のものを一括した。69点が出土したが、大方が浅鉢と考えられる。滑沢や器厚からは、竹管文系、とくに諸磯 b 期の所産と思われるが、あるいは中期のそれを認識したものもあるかもしれない。

図示した578・579は、無文を基調とした浅鉢で、破片の曲線からは、両者ともかなりの大型品と推定できる。両者とも、胴部で著しく屈曲するが、前者は稜を残して、後者は丸みをもって下半に移行する。また、前者では下半の磨消した縄文とともに、わずかながら赤彩の痕跡が観察できる。

7類 (第85図580~584)

縄文時代中期前半の勝坂系土器をこの類とした。今回の調査での出土量は限られており、38点と、分類可能土器の1%にやっとながら程度しかない。しかし、調査の概要でも述べたとおり、精査を行った縄文包含

層より上位には中期土器を含むがれき層が堆積していた。もし、この部分の精査が敢行されていれば、出土量は多少なりとも上乘せできたことだろう。だが、この期の洞穴・岩陰遺跡としての環境は著しく劣っており、妙音寺洞穴遺跡に残された遺物の主体とはなり得なかったと考えられる。

このような調査の経緯があるため、出土位置は重機掘削から免れた洞穴内に集中している。また、出土量が少ないため、採掘し得た破片は限られており、細分類は行っていない。

580~582は有文の深鉢だが、残された破片が小さく器種系列が半断できない。区画経帯の脇はいずれも太い単沈線が処理されており、勝坂系でも末期の井戸尻期の所産と考えられる。また、583・584は縄文施文部の破片であるが、583は上位を無文とした縄文単純施文の個体かもしれない。

8類 (第85図585~588)

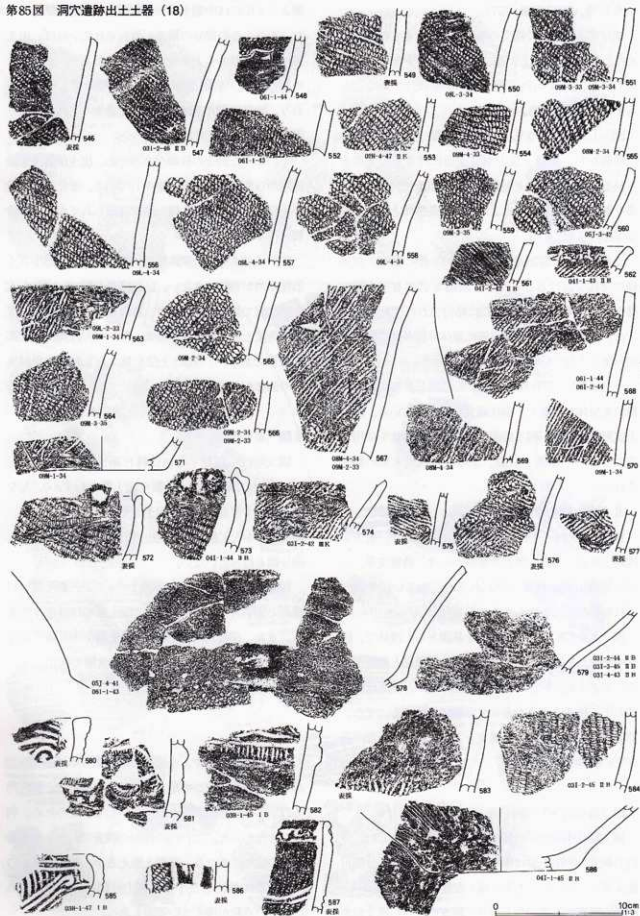
縄文時代中期後半の加曾目 E 系土器をこの類とした。今回の調査では、分類可能土器のわずか0.5%を占めるにすぎない16点が出土したのみである。また、勝坂系とおなじ経緯から、出土位置は洞穴内に限られ、細分類も行っていない。

時期はずれるが、585・586はキャリパー形土器の口縁部と胴部片で、587は連弧文系土器の口縁部片である。また、588は条線施文の鉢形土器か両耳壺の底部片であり、妙音寺洞穴遺跡縄文包含層で検出できたもっとも新期の人工遺物となる。

9類

風化による摩滅や、小片のため分類の帰属が半断つかなかった土器をこの類として統計に加えた。洞穴内で273点、前庭部で568点が、主として小片のため、判定できなかった。これは、今回の調査で出土した土器全体の19%にあたり、高率と思えるが、掘り上げ土の土壌水洗で検出した小片も極力分類につとめたために、その点数が増えている面もある。

第85图 洞穴遗址出土土器 (18)



(2) 出土石器

妙音寺洞穴遺跡の調査で出土した石器類は、総計で20,670点におよぶ。このうち、石製装飾品類をふくめた石器製品は1,215点あり、その多くが縄文時代でも早期から中期にいたる石器が包含されていたが、土器の出土量に比して、この期に特定できる一般的な製品は少なめであった。

これら石器群は、狩猟・加工・粉碎などの作業別にあたる器種によって大きく7つの大分類をおこない、剥片と石製品類の2類を加えて9類に分類した。そしてさらに、各類では、形態や製作手法、用途などで3から7の細種を設けた。

分類項を設定するにあたっては、出土石器種の時期的増減が統計などに適するよう考えたが、そもそも、石器が時期別特定にそぐわないうえに、礫器などでは分類どころか、数多くの偏差の前に作業そのものに窮する有様であった。そのため、石器類の主体をしめる削器・礫器類では、統計に反映されないような大まかな分類しかなしえなかった。

分類別にみた石器類の分布では、石製品類が洞穴内から前庭部雨垂れ下に集中する傾向がみられた。そして、これとは逆に、磨石類では雨垂れ下から前庭部の出土品が大半を占める。そして、削器類は石礫寄りだが、前庭部にも一定の出土量があり、礫器は削器と磨石類の中間相を示す。

その重量に応ずるような石器器種四大別の分布集中は、製作場所や機能・用途と作業場所が対応するのか、時期的な製作・遺棄の好みに起因するのか、一律な判断は下せない。だが、そのいずれであるにせよ、洞穴の利用形態に直接結びつく往時の形跡が隠されているのは確かであろう。

1類 (第86図1～第87図84)

石礫類をこの類にあてたが、9類で報告する1点の尖頭器をのぞき、骨角器をふくめた遺跡出土品でも唯一の狩猟器種である。未製と判断した加工品をあわせ

た総計は213点におよび、全出土石器類の18%を占める。このうち製品率は78%ある。

1A種 (第86図1～55)

三角形、もしくは凹基の基部を作りだすものをこの種とした。1B種とのちがいは、明確な脚部を作り出すか否かを目安としているが、両者の中間形態を出すものもあり、その境は曖昧な部分が残る。

89点が出土しているが、洞穴の奥から前庭部まで、広域に分布しており、とくに洞穴内から前庭部の雨垂れ下での密度が高い。出土高では、全体的に1B種より上位に分布の重心が偏る傾向が認められるが、明確なものではない。

形態調整は、バルブの除去を含め全面に及ぶが、素材のめぐりあわせによっては44のように最小限の加工で済ませることもあるらしい。だが、21・53などは器厚いまだあつく、周縁への加工も不足気味で、未製品とも考えられる。また、11も先端方向からの衝撃によって破損している。加工も荒く、あるいは製作途中の破損かもしれない。

形態的にこれらを見ると、変移の分散は間断なく、さらなる分類は難しい。そのなかで、側縁が一律とはならず、先端がすばまるものは、基部のえぐりが少ない傾向があり、1A種のなかでもさらに高位で出土している。だが、この傾向が時代差になるのか否かは判断できなかつた。

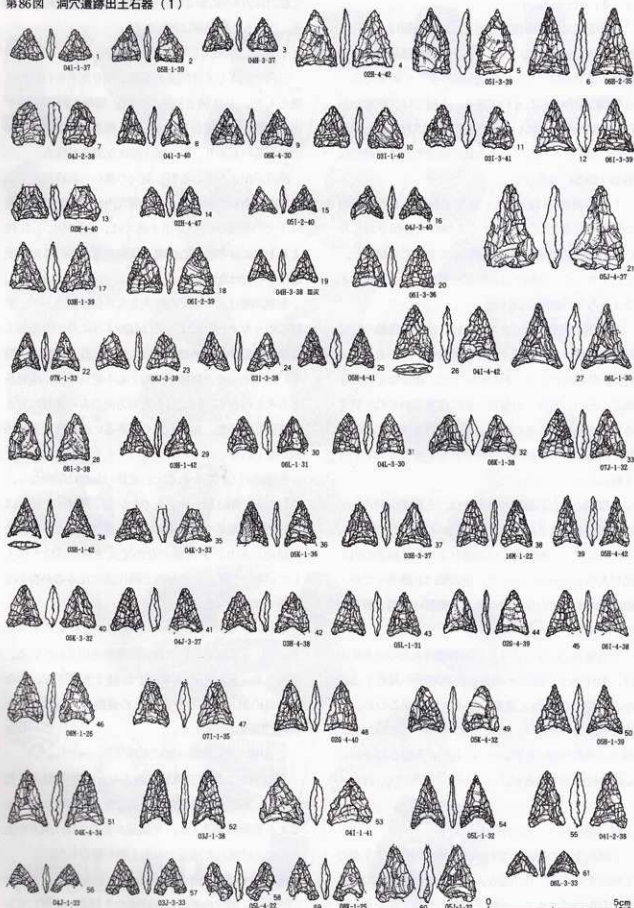
石材は、ホルンフェルスを使用する46をのぞき、チャートと黒曜石が約半数の比率で使用されている。このうち、黒曜石の比率は1B種より高率で、おなじ石材の剥片である8A種との連動は、石器の出土状況の項でも説明した。

1B種 (第86図56～第87図77)

先端部が二等辺三角形であることは1A種と変化しないが、基部の脚が明確に識別できるものをこの種とした。形態の構造上か、欠損品が多く、71は洞穴の北と南のかげ離れた地点での出土物が接合した。

総計で43点が出土しているが、1A種ほどではないにせよ、洞穴の奥から前庭部の9列まで分布してお

第86图 洞穴遺跡出土石器(1)



り、洞穴内から前底部の雨垂れ下での密度が高いことも同種と共通している。出土高では、全体的に1A種より下位に偏る傾向があるが、特定の土器群と対応するような明確な出土の偏りはない。

形態は、脚下端が平坦になるのも一つの目安だが、おなじ種内でも、67のような軸長に秀でた二等辺三角形と、76のような正三角形に近く長脚状に整えられるものの両種がある。このうち、58と63は剥離が行き届かず、未製品の可能性がある。

石材は、66が粘板岩、58・61・63が黒曜石であるほかは、すべてチャートを使用している。おなじ石材の剥片である8B種とは、平面・断面的に集中位置が似かよっており、洞穴内での製作が彷彿される。

1C種 (第87図78~82)

厚手で先端部が丸味をもったものをこの種とした。9点を分類したが、ほとんどが洞穴内で出土している。前二種とは根本的に異なり、機能的には各段に劣るはずで、あるいは未製品や、82などは削器として分類すべきだったかもしれない。石材は黒曜石チャートで占められている。

1D種 (第87図83・84)

外形が三角形とはならず、槍形のを分離したが、図に示した2点のみの出土である。このうち、83は基部の両側から挟り加えられ、舌状となる。これに対し、84は厚みのある槍形で、狩猟外の刺突具ともとれる。石材は、いずれも黒曜石だが、出土位置には特段の傾向はみられない。

1E種

基部の破損のため分類しきれないものをこの種とした。23点を数えたが、出土位置は他種と大差ない。先端部をみるかぎり、すべて1A・1B種のいずれかに属すると考えられる。図示したものはない。

1F種

石燄の未製品と考えられるものをこの種とした。図示したものはないが、前四種の記載でふれた一部がこの種に帰属する可能性もある。分布は同類他種の域と重なるが、より洞穴から底下の南に集中している。出

土高は上下の全域にわたるが、とくに中層に多い。

2類 (第87図85~第91図188)

定型・非定型に関わらず、削器類をこの類にあてた。石器製品の17%を占める210点が出土した。その量は石燄と並び石器類の第二位を占める。その多くがホルンフェルスなどの大型刃器に通じる素材をもって製作されている。

整理時にはこれらを6種に分類したが、それぞれの基準は、チャート黒曜石石材の小型品を分離した上で、ホルンフェルス石材などの粗大製品のなかでも定型的なものをまとめ、さらに、剥片使用部位や握り部の特徴などによって分類した。

このなかで、粗大製品は、石材の共通もあつてか、礫器と非常に近い製作手法を用いており、類別すらも窮するものが多かった。その際の目安は、機能部の剥離の大小と、器種名に見あう強度の目安となる厚さによつた。だが、分類の最終にあつても行方を決しかねるものが多かった。礫器の項でもふれたが、機能に即した器種形態が未確立であることが中間形態の多出を許容していると考えられる。

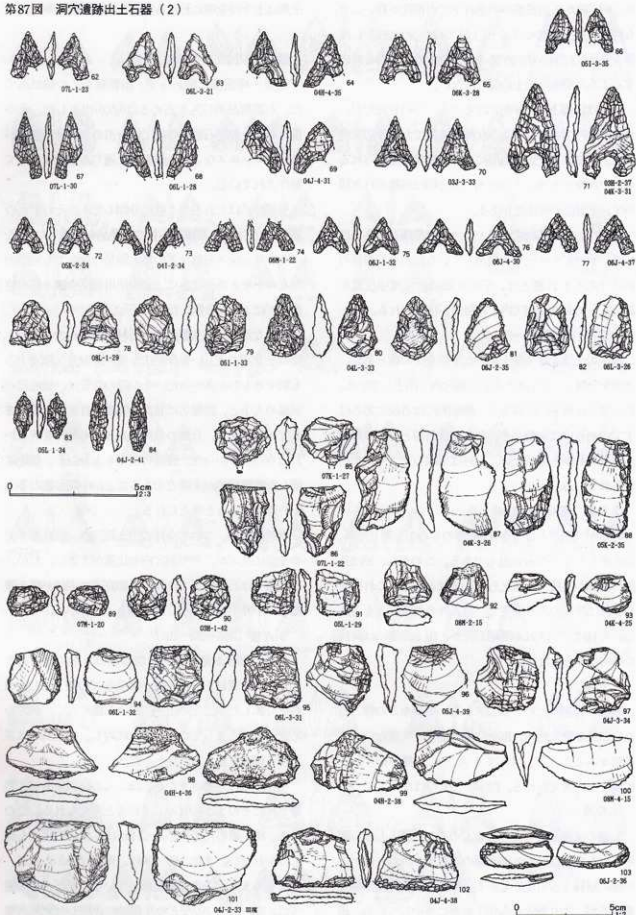
前述したが、これら全体の出土範囲は、前底部までの全面に及ぶが、やや洞穴内の比重が大きいが、その偏りは石燄ほどではなく、前底部に主体が移る礫器との中間の様相を示している。

2A種 (第87図85~103)

細かな調整剥離を加える削器類のうち、黒曜石とチャートを素材とした小型の製品をこの種とした。44点を分類したが、その出土位置は石燄に近く、洞穴から底下にまとまっている。これに対し、出土高にはさしたる傾向を見てとれなかった。

その形態はさまざまだが、ほとんどが剥片素材に影響されたそのままに甘んじていると考えられる。このうち、85が錐の可能性はあるほかは、具体的用途も推しはかれない。また、89・90は、用途はわからぬが、外周をくまなく入念に細剥離している。だが、その他では、88・99・102などの片側縁に連続した剥離調整

第87图 洞穴遗迹出土石器(2)



が残る程度で、利用の場面に即して最小限の加工をしたものと想定できる。

石材は、89・90・92・93・103が黒曜石を利用してはかきはチャートである。

2 B種 (第88図104~113)

ホルンフェルスを中心とした石材を利用する大型品のうち定型的な形態加工を施すものや、それに類する機能を持つと半断されるものをこの種とした。10点を分類したが、ほとんどが洞穴から雨垂れ下で出土しているうえに、条痕文系土器の出土層に匹敵する高度で検出されている。

定型認定の根拠となる具体的な器種は、石匙としてであるが、縦型となる104~106、横型の112・113ともつまみ部の作りだしが甘く、前期以降の石匙そのものとおなじ用途に供されたかは定かでない。縦横ともに機能部は非対称となる癖があり、縦型の下位でとくにその傾向が強い。

つまみこそ作りださないものの、その非対称そのままの形態で加工が及んでいるのが107~111である。いずれもその非対称部を機能部とする細剥離が施されている。また、108を除いた縦型は、つまみの有無を問わず、一方の側縁に見あった形態の横長剥片を利用しているが、おなじような剥片利用の手法は、横型の機能面に対しても共通している。

石材は、104がチャート、105・106が安山岩、110と113がそれぞれ粘板岩と砂岩を利用するなど、削器や礫器のなかでも偏差が著しい。これが、定型品への思い入れを表しているのか、搬入品の多寡なのかは112の結晶片岩例もあり、定かでない。

2 C種 (第88図114~第89図132)

ホルンフェルスを中心とした石材を利用する不定形の大型品のうち、使用時の握り背を自然面のまま残すものをこの種とした。この分類は、手持ちの使用を前提とした握り背が石器軸と直交するような剥離面になる2 D種と対立する、削器でもより細かな分類だが、両者をあわせた出土量は2類全体の半数をこえるため、他と同格に扱った。

機能部との対角を配慮し握り部を見極め、34点を分類したが、出土位置は洞穴内外の広い範囲にわたっている。また、垂直分布では、極端な高低位には存在せず、ほぼ中位に多く出土しており、おおよそ条痕文系土器の出土偏差と一致する。

だが、残された全形はまちまちで、116・120を代表とする縦型から、128・129を典型とする横型などもあり、さらに端部に加工を施すもの(123など)、側縁(114など)、双方(122など)、そして鋭角な端部の両縁(119)などに細部にわたる調整剥離を施すなど、あらゆる類型が存在する。

このうち、130は礫器に見あう大きな剥離と、削器分類の根拠となったこまかな剥離が同一の縁辺に加えられている。断面形も厚く、重量もあり、礫器の転用品ともとれる。おなじように、131も剥離があらく、分類の半断に迷う。礫器の項でも述べるが、妙音寺洞穴遺跡では、礫器と大型削器をめぐるこのような中間形態が多く出土している。機能器種の一致した使い分けをせず、共通の石材のもと、その場に応じた石器製作が行われた結果ともとれる。

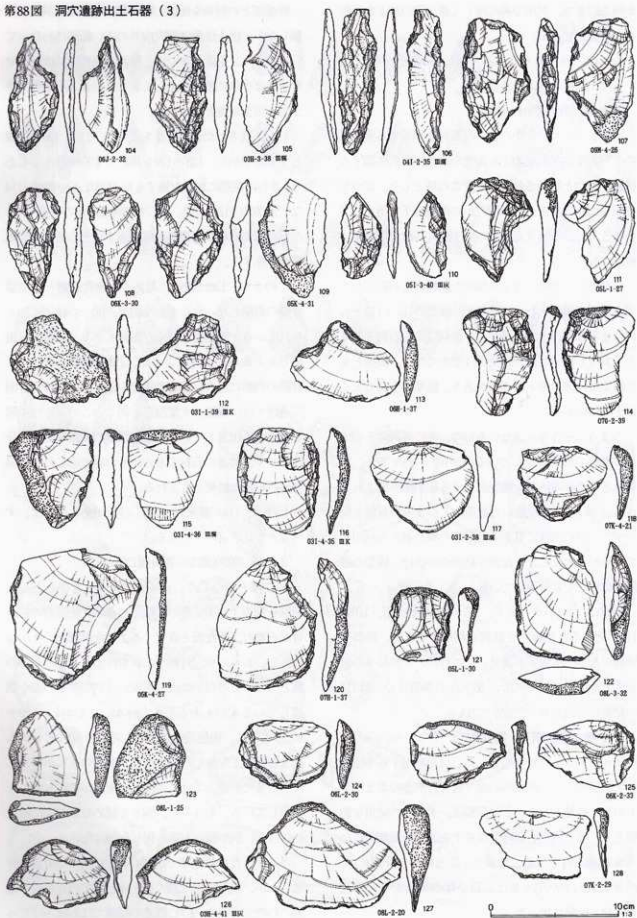
石材は、114が凝灰岩、130が砂岩であるほかは、すべてホルンフェルスである。

2 D種 (第89図133~第91図179)

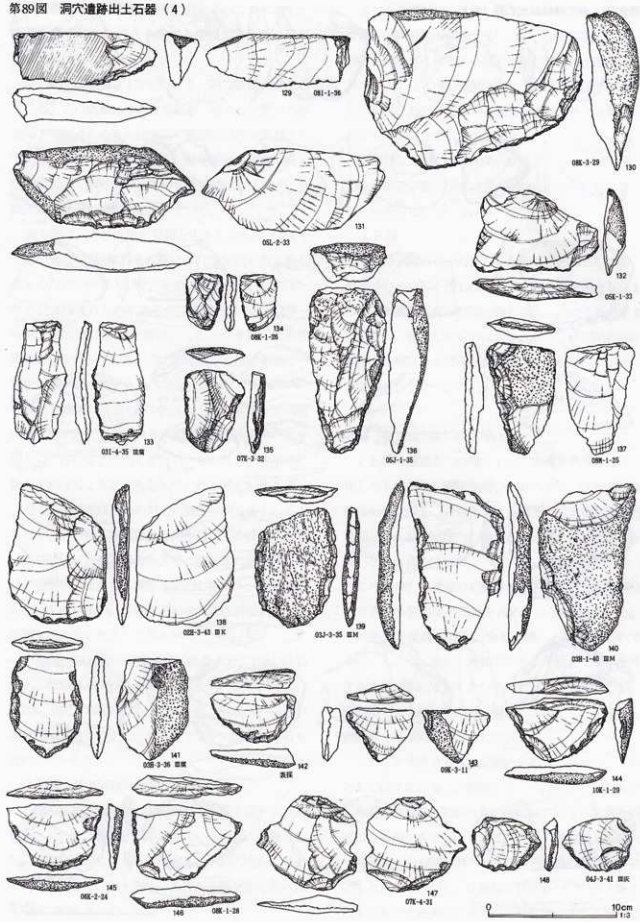
2 C種とおなじく、ホルンフェルスを中心とした石材を利用する不定形の大型品のうち、使用時の握り背が石器の主要な面と直交するような剥離面でまかれたり、打割でこれを作出するものをこの種とした。このなかには、あるいは切断破損の面を誤認しているものもあるかもしれない。しかし、159~162のように、機能面よりもむしろ握り部に対して入念な形態加工を施した例もあり、素材の選別から加工に至るまでの途上では、同部への配慮が存在したことを示している。ちなみに、握りと認めた剥離面に他片が接合し、別形態の石器と化した例はない。

このような分類基準で削器の43%にあたる91点を分類したが、出土位置は洞穴を主体として内外の広い範囲にわたっている。また、既述の分類ではおぼろげだっ

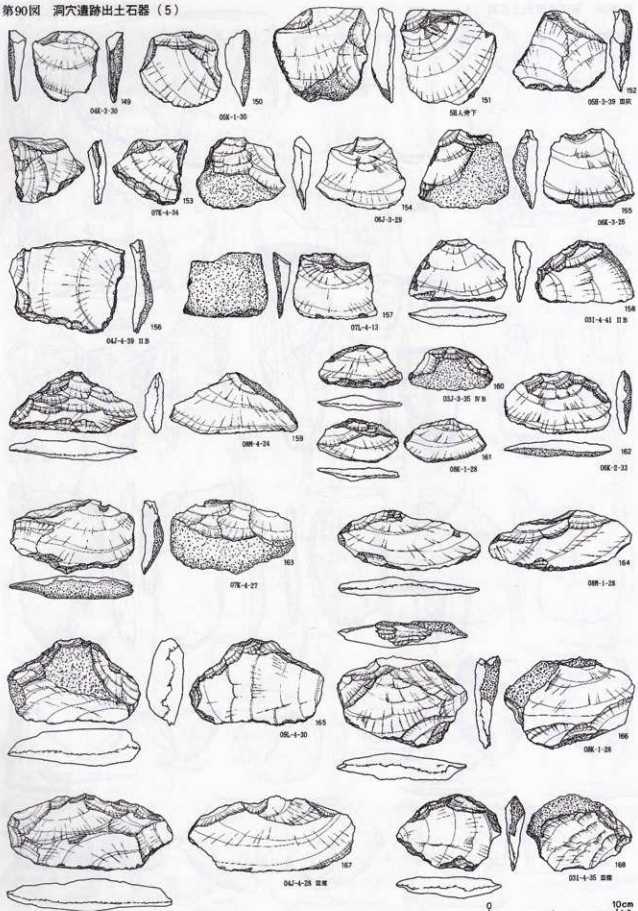
第88圖 洞穴遺跡出土石器(3)



第89圖 洞穴遺跡出土石器(4)



第90圖 洞穴遺跡出土石器 (5)



た前庭部南西への集中も明確に現れる。これに対し、垂直分布では、2 C と共通する中位で多いが、ほぼ全高度で出土している。

これらの素材は、179のをぞぎ、剥片素材を選択している。その縦横はまちまちだが、握りの位置から縦使用と半断されるものはすべて縦型の剥片を素材としている。そして、179のみは、礫塊部分が大きく残る原材の両端を断ち割り、外形を直方体状に仕上げ、直角に近い縁辺に機能部を設けている。

握り部は、素材段階の形態を生かしたもの(134・151・175)、形態整形後の最終に打割を加え面を整えるもの(166・172・178)、その逆のもの(145・156)など、各段階のものがあるが、前述のように、159～168などは、握りが扇の要状になるよう多数回の形態調整剥離を行っている。不整形ながらも機能器種の一致を示唆する一群である。

また、極端な縦型の133や136などは、きまって側縁に機能部が設定されており、端部の剥離面をそのまま握るのでけいささか心もとない。これらは、使用時に指先をかけるよりどころとしていたと考えられる。

対して、横型は握りの対辺に機能部がくもの为主体だが、握りが下底となる三角状のものも、頂部をはさむ二辺にわたる場合がある。機能部の剥離は、前述の扇形態のなかでも調整使用の結果か、半断がつかないものが多い。目的にあわせて細部調整剥離の必要を決めていたようである。

石材は、143が安山岩、146が結晶片岩、159が砂岩であるほか、すべてホルンフェルスである。なお、141は、凹石の破損転用品であるが、削器への宗旨がえ自体めづらしい上に、ホルンフェルス原材の凹石も他にはみられない。

2 E 種 (第91図180～188)

石器内に極端な厚さの変化がなく、握り部をよりどころとした前二種の分類が施せないものをこの種とした。13点を分類したうちのほとんどが洞穴内から出土している。また、出土高は、大方が縄文文化系土器の出土範囲で検出されている。

これらの素材は、大きい母岩から剥ぎとった、楕円で薄い一次剥片で共通しているが、縦横の二種がある。180・186などにはやはり握り部を意識した剥離が施されており、2 D 種と類似する。概して周辺の細剥離が広範囲にわたっており、粗製削器のなかでも厳選されたものと見なすことができる。

石材は、183・185・187が砂岩と共通しているが、出土位置や形態手法には統一がない。他はホルンフェルスが使用されている。

2 F 種

形態や剥離の大小などから削器と思われるものの、破損のため全形が推しはかれず、細分類を施せないものをこの種とした。削器全体の9%にあたる18点をまとめたが、図示したものはない。また、破損品のみが集中する地区などはみられなかった。石材は、ホルンフェルスが主体である。

3 類 (第92図189～第110図485)

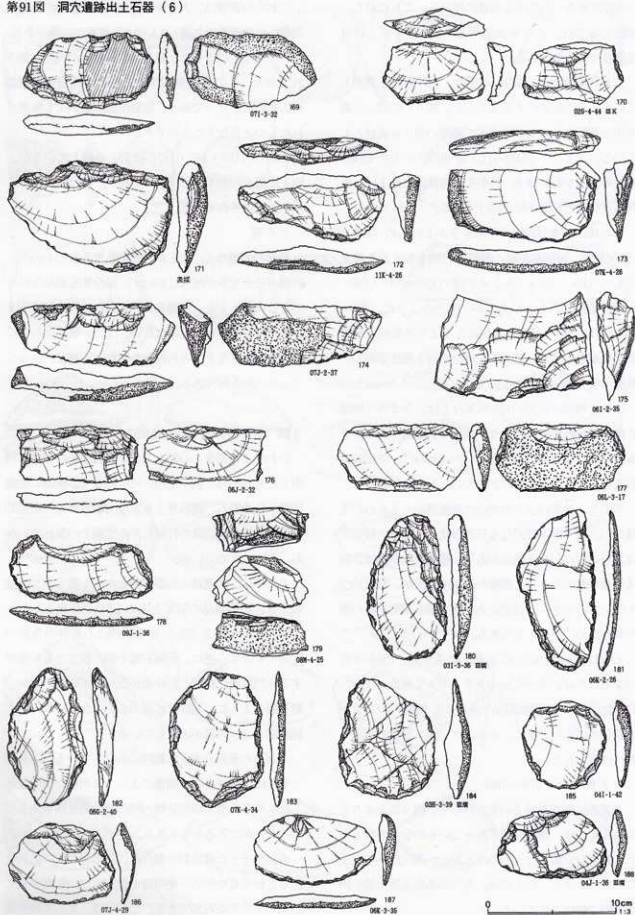
いわゆる礫器をこの類とした。礫塊をそのままに利用したものから、剥片を用いたものまで、礫器の定義印象から逸脱し、礫石斧とも表現できるような定型的な製品も、前期以降の打製石斧の定義との兼ね合いから、ここに含めている。

この類は、本遺跡の石器群のなかでも最も多くが分類でき、石器製品の53%を占める644点が出土した。その多さを反映してか、分布範囲は石器群のなかでもっとも広く、逆に、他類石器や剥片類までもが激減する9列以西に安定した分布が広がっている。だが、磨石類のように、前庭部に偏ることはなく、洞穴内も前庭部とはほぼ同数出土している。

これらの垂直分布も広範囲にわたっているが、全体としては下位に多い。細種によっては明確な傾向を示したものもあり、類似分類の間に時代的推移をあとづけることができるものもある。

今回出土した礫器群の製作は、その場の間にあわせととれるものから、使用時を想定しつつ形態を整えたものまで千差万別である。これらは、主たる機能部

第91图 洞穴遺跡出土石器(6)



と推定される打割の部位により縦型と横型に大きく分かかれ、分類の際には第一に使用部位と形態を最優先に意識した。だが、詳しくこれらを追いつとめると、無数の中間形態に出くわし、明確な分離は不可能となってしまう。これは、礫器と判断した分類のなかでだけではとどまらず、刃部作出の剥離密度や大きさでみれば、削器との関係も同様である。

礫器の機能は石材片理や転用・破損などでも変化しつつも、意にそう許容範囲はかなり広がったものととれる。むしろ、この曖昧さこそが使用の実態を如実にあらわしているのかもしれない。

大まかな分類のなかでは、たとえば、握り部を意識して原材の自然面を残す型のもので、横歯の鋸状のものや、握り以外の三面を調整し、全体を四角に整えるもの、握り以外を二側縁化し、全体を三角状にするものなど、おぼろげながら典型例が見てとれる。しかし、これをすべてに適用するには例外が多すぎる。そのため、7種に分けたやや幅広い分類のなかで、こまかな変異を記述する。

3 A 種 (第92図189～第96図240)

周囲に均等やそれに近い打割調整を加え、基本的に縦型の使用をめざして形態調整に意をそそいだもの。いわゆる礫斧とよばれる縄文時代早期の定型斧類で、前期以降の打製石斧との分離のため、出土位置付近の土器で一応の時期の目安をつけ、側縁に刃痕が施されていないものをまとめた。それでもなお、前期以降の打製石斧がまぎれているかもしれない、233などは早前期土器の出土位置の狭間で出土している。

出土礫器の約1割にあたる65点が出土したが、分布は調査区内で均等に出土しており、垂直面では中位を主体とするが、下位にも散在し、逆に上位では少ない。このなかでも、頭部の尖る撥形のもの、ほとんどが縄文系土器の出土範囲と重なることから、同土器に伴出すると考えられる。

これらの形態は、短冊形から撥形、そして偏刃や分銅形・柳葉形もある。一般に、短冊形ほど器厚があつい。このなかには、側縁調整のいかんによっては背

を入念に調整した405などの3 D類と見まがうものもある。また、実際には、分類に反してこの用途として供されたものもあるかもしれない。

このうち、189～195は、頭部が尖る撥形に整えられ、定型的礫斧のなかでも比較的薄く仕上げられるのが特徴である。素材段階での選択に気を配り、片面に自然面を残したまま、外周だけの最小限の加工ですむよう心がけている。また、198・197は、おなじくその薄さを求めたのか、自然面にも剥離が加えられる。199～207などもその類似例となろうが、205・206などの頭部が尖らない撥形も、当時の模範型と考えられる。

もう一つの典型は、214～220に代表される短冊形かつ器厚の薄かったものである。出土高は縄文系土器の範囲の下位から早期中葉土器群の出土範囲にもさしかかる。このことから、撥形との間に時間差を認めることもできる。しかし、腹部の厚みは、最小の形態で最大の重量を求めたようにも思え、使用目的のちがいによる同期での偏差とも考えられる。

一方、221以下は基本的には斧形をめざしつつも、さまざまな形態の偏差が見てとれる。228のような小型で西洋梨形のもの、232・235などの偏刃、236・237などのひさご形、238・239などの長方形があるが、ほとんどが縄文系土器の分布範囲が早期中葉土器の上位に収まる範囲で出土している。

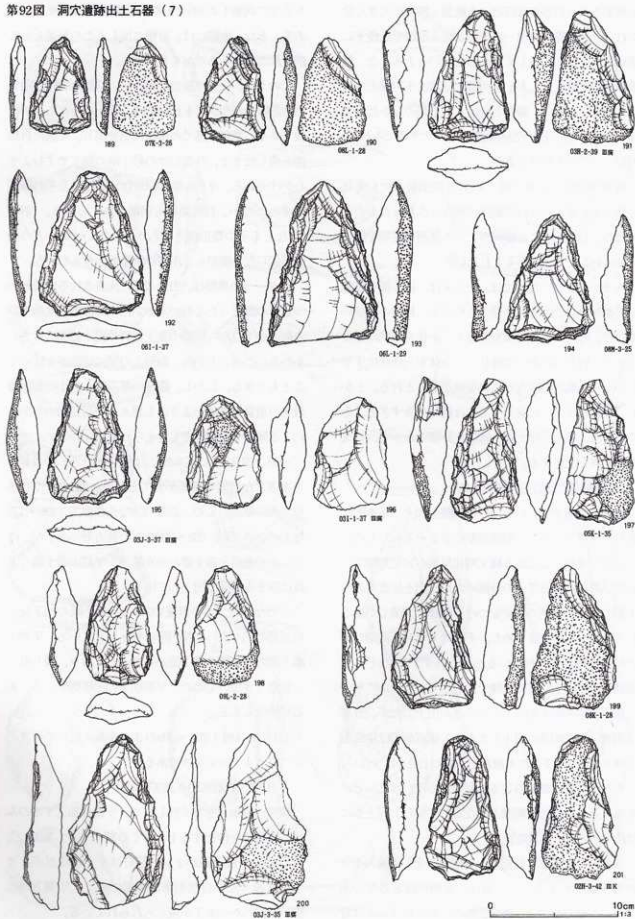
このなかで、小型軽量の240は、最小限の加工ながら刃部の切り立った楕円形に整えられている。早期中葉土器の分布域の最下位から出土しており、磨り痕こそ観察できないものの、早期前葉の局部磨製石斧である可能性もある。

石材は、189・202・209の3点の凝灰岩をのぞき、すべてホルンフェルスである。

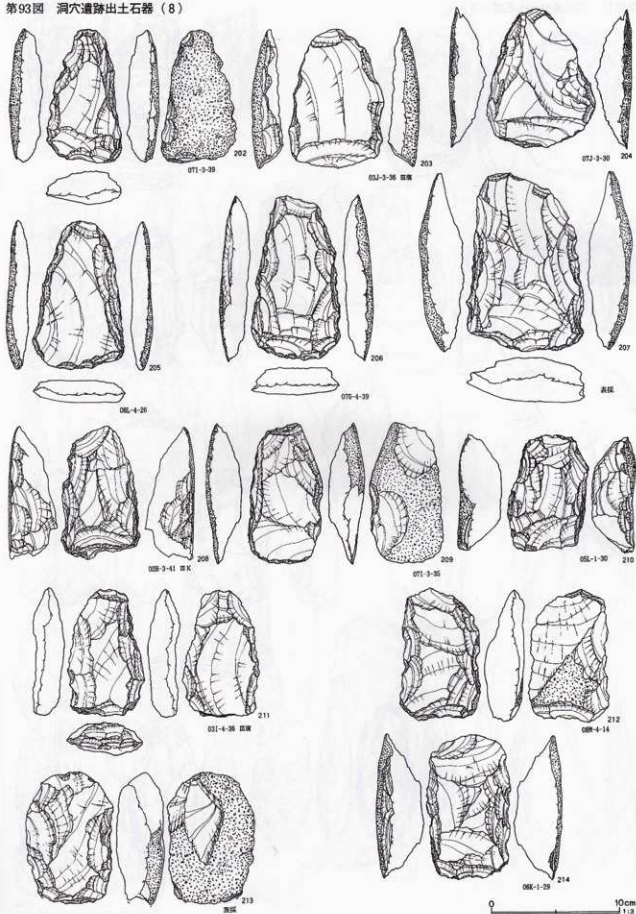
3 B 種 (第96図241～第97図263)

礫塊の原形状を多く残しつつ、一端を加工するのみで、機能部を作出するものをこの種とした。350などで、3 C類の一部と似かよひ、区分はやや曖昧だが、こちらは握り部の自然面率が極端に多く、片側方向に限って何らかの加工が荒く入れられている。

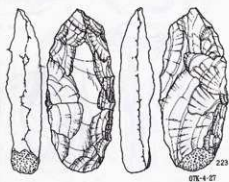
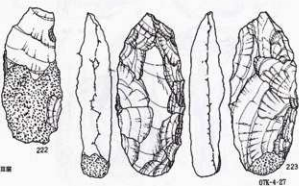
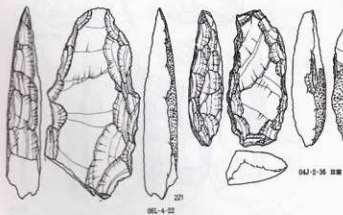
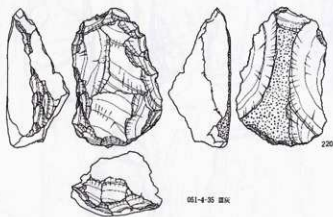
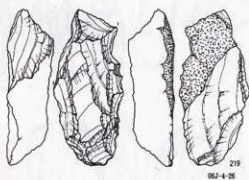
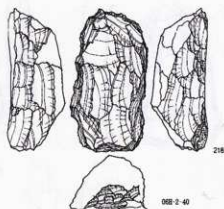
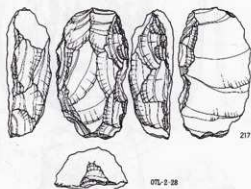
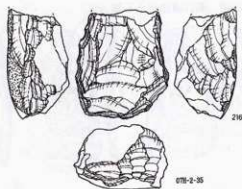
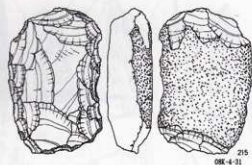
第92图 洞穴遗址出土石器(7)



第93圖 洞穴遺跡出土石器 (8)

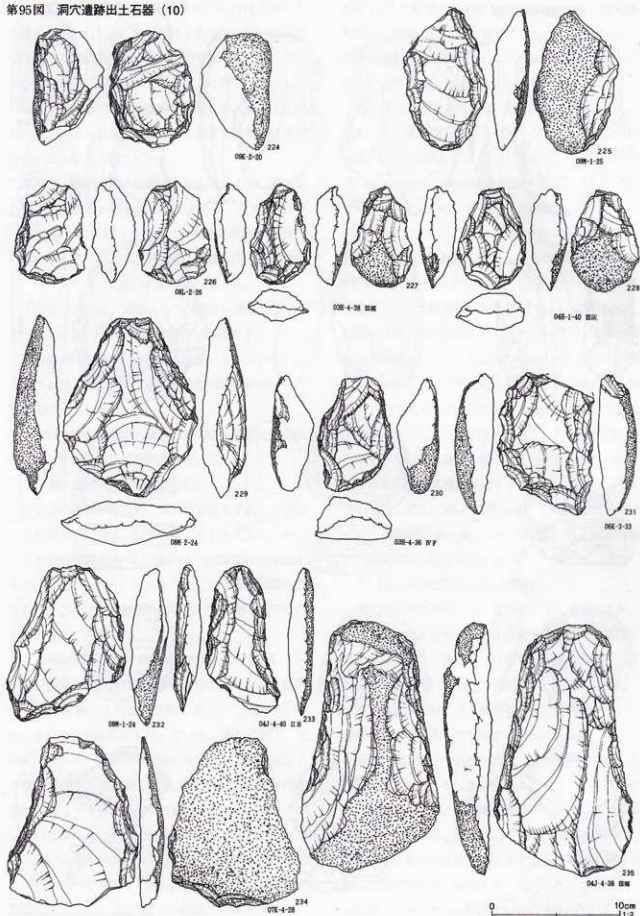


第94圖 洞穴遺跡出土石器 (9)

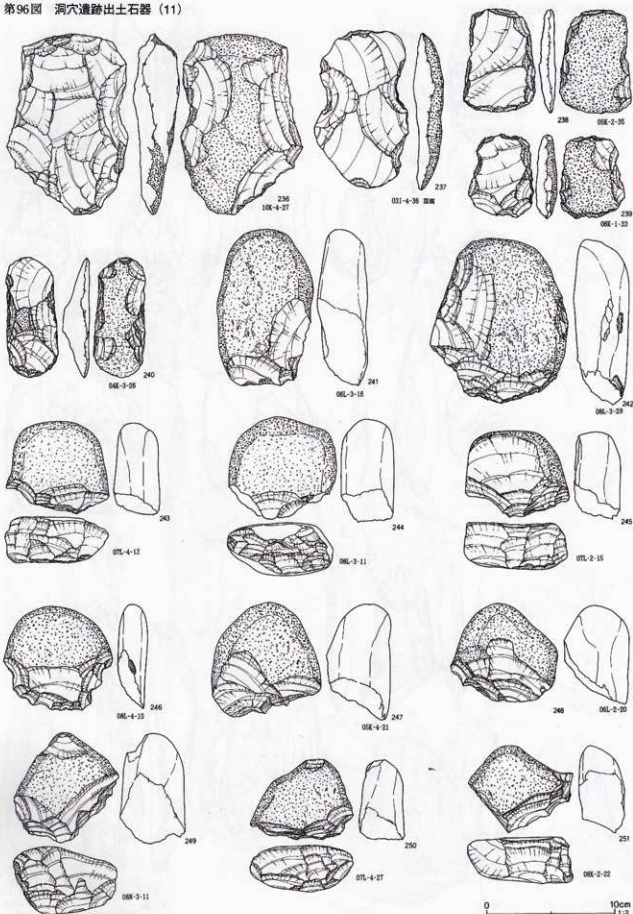


0 10cm
1:3

第95图 洞穴遗址出土石器(10)



第96图 洞穴遺跡出土石器(11)



分類時一旦3C類へと帰属させ、その後さらにこの種を抽出したため、23点と数は多くないが、3Cの項で述べる類似品とともに、その実数は増加するだろう。これらは、前庭部、それも南方に偏って出土している。また、多くが熱糸文系や押型文系、沈線文系土器の出土範囲と共通して分布しており、典型例は礫器のなかでも古い一群となろう。

形態は、選択した自然礫にも左右されるが、厚いものが多い。縦から横への変異があるが、なかには248~253のように、握りの好みで自然礫の角部を意図的に選択するものもある。刃部加工の基本は側縁のみで、厚いものは刃部角が鈍る傾向がある。

刃部角の鈍化は、刃器としての機能を損なうはずであり、これらが石核である可能性も検測できる。だが、この刃部角は礫器内の他種でも共通しており、それに見あう石材、かつ大きさと量の小型石器製品は、この遺跡では出土していない。

石材は、246が砂岩、258・259が結晶片岩である以外はホルンフェルスが選択されている。

3C種 (第97図264~第102図354)

不定形の礫器群のうち、握りの安定を意識して頭部に自然面を残しつつ、打割を施したものである。おなじような分類基準の3B種とは、石器製作の技法としては共通しており、はっきりとした分離は困難な面もある。これは、自然面の残存率が器表面の過半を占めるか否かで半断した。

この種に相当するものは総計で199点が出土しているが、洞穴主軸方向に沿って広く分布している。なかでも前庭部7・8列南の分布が多く、この集中が他類がまねた9列以西にも続いている。垂直分布は、点数を反映してか、上下の全般に及んでいるが、類似する礫器形態である3Bより上位、かつ、握りが剥離面の3Dより下位に集中する傾向がある。

素材は礫塊そのものの断片から加工するもの(312)と、剥片の利用(265)があるが、加工後はいずれとも決しがたいものが多い。握り部は、母岩礫の使用部位によって、317のような直線状の横刃型から、

266のような縦型と化したものまでである。また、その形態は、礫塊の直線部を利用するもの(276)、あえて隅部を選択するもの(346)、それほど意識したとは思えないもの(334)がある。

握り部の形態と刃部には、ある程度の相関があるようで、とくに、横刃型でその関係が現れている。直線では、総じて四角に近くなる三側縁加工(280)、V字状の刃部となる二側縁加工(296)などが多く、隅部や丸みのあるものは、直刃の側縁加工(330・340)が多い。また、前の二者では器厚のあつもの多く、刃部角が鈍くなる傾向もあり、後者のうち、丸背は比較的小さい資料が多いのも特徴である。

さらに、厚手横刃型のなかには、285・337のように、腹部のうち一面を握りとして自然面を残し、もう一面を薄く剥離し、主として反対の腹面から急傾斜の刃部を作ったサブグループがある。形態と手法が共通する類型の一例であり、354のように、熱糸文系土器が出土する最下位から、早期中葉のそれまでに至る範囲で多く出土している。薄く一撃が加えられるか否かのちがいはあるが、3B種と共通する。

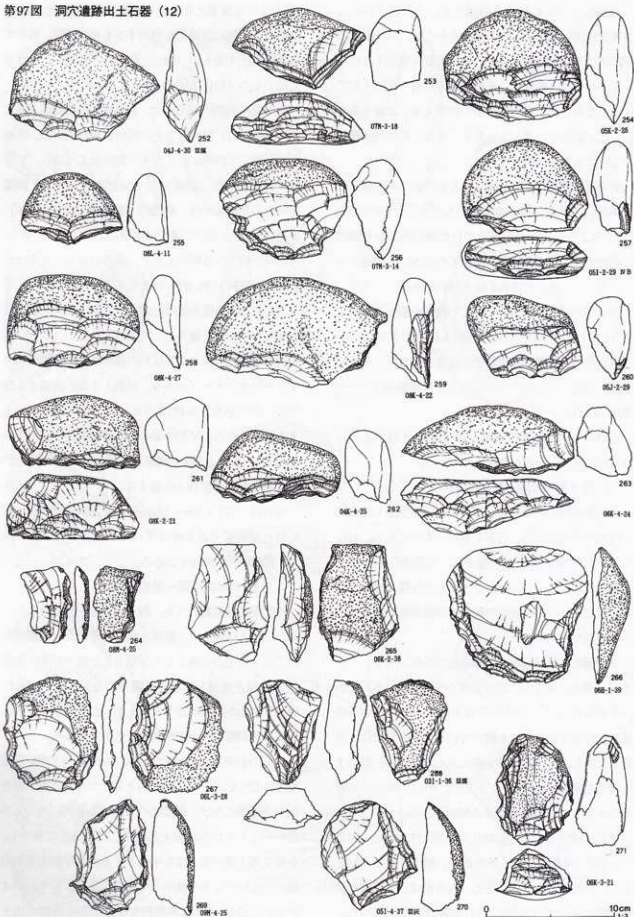
石材は、272・308・339が砂岩、286が凝灰岩、327が緑色凝灰岩である他はすべてホルンフェルスであり、掲載同種の95%を占める。

3D種 (第102図355~第109図462)

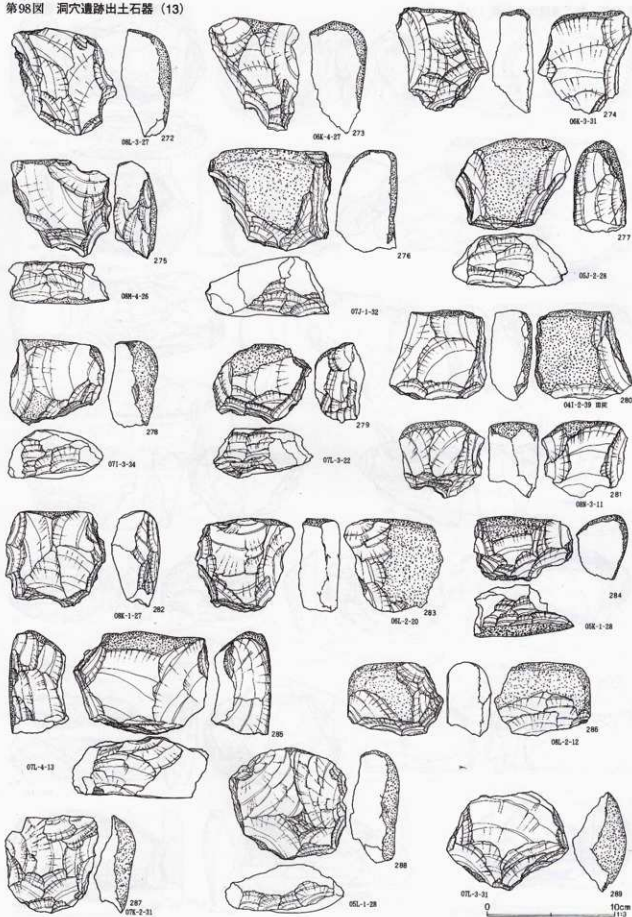
不定形の礫器群のうち、握りの安定を意識するが、前の二種とは異なり、腹部と直交するような剥離面をあてるものをこの種として分類した。握り形態は刃器の2D種と共通し、とくに縦型のなかにはいずれに帰属させるか半断に迷うものもあった。両者の弁別は刃部加工剥離の大小で半断するしかなかった。

分類の結果263点をあてたが、この種だけでも石器製品の22%を占める。3C種とおなじく、分布は調査区的全範囲に及び、他器種の激減する9列以西でも35点が出土している。出土高は3Cより高位に集中し、条痕文系土器の出土位を中心とするが、早期中葉や前期の出土位でも多く検出している。また、わずかではあるが、424のような典型例を早期前葉土器群の出土

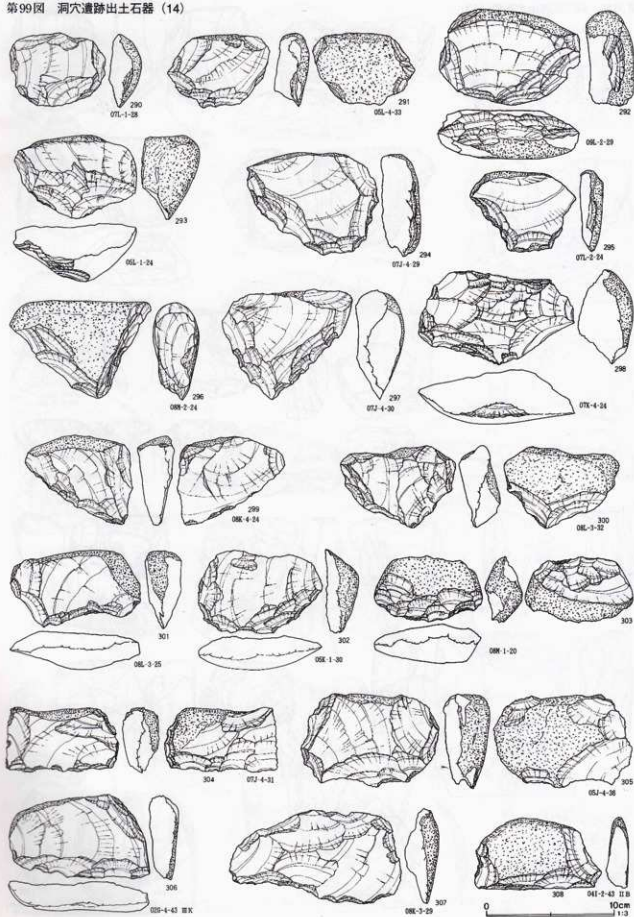
第97图 洞穴遗址出土石器 (12)



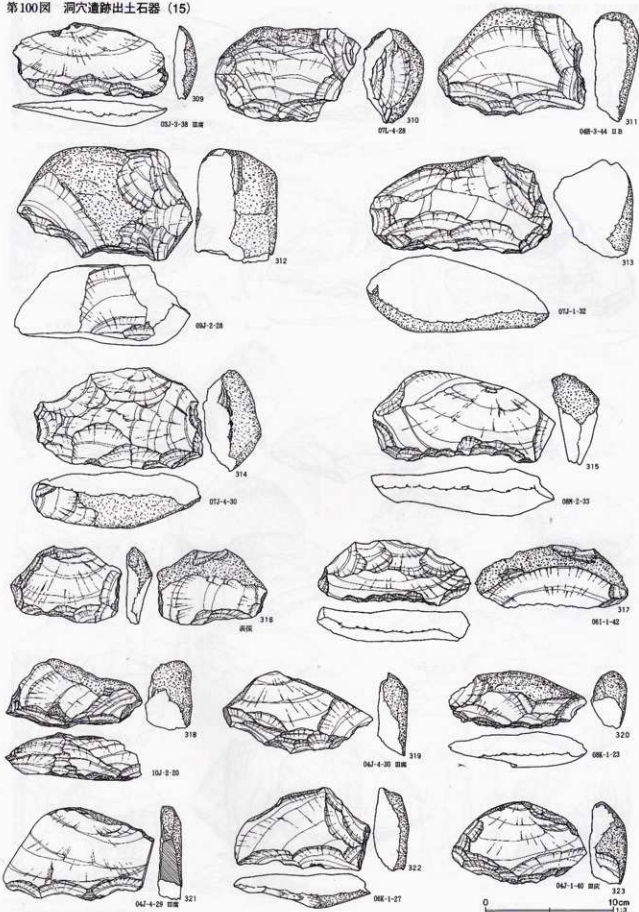
第98图 洞穴遗址出土石器 (13)



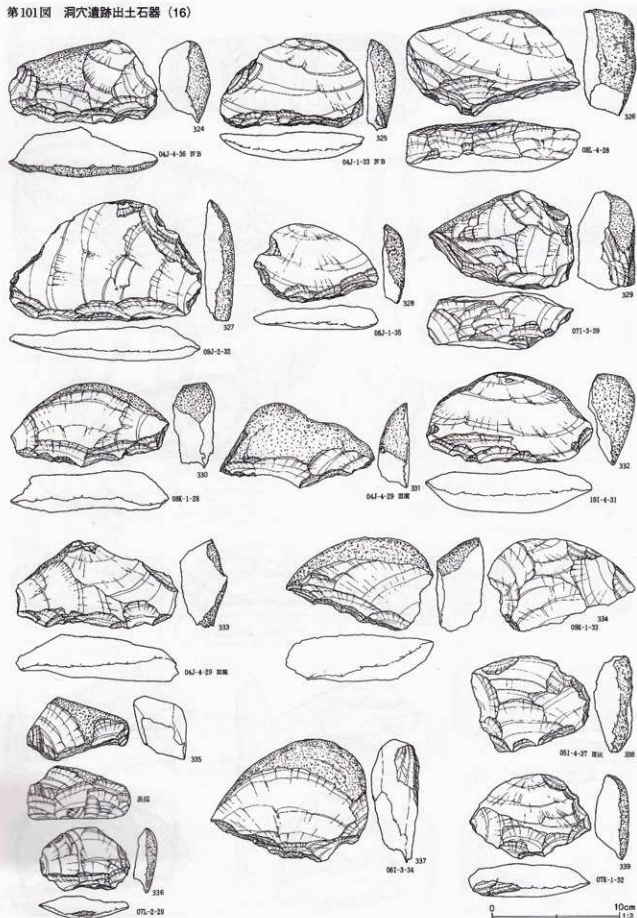
第99圖 洞穴遺跡出土石器 (14)



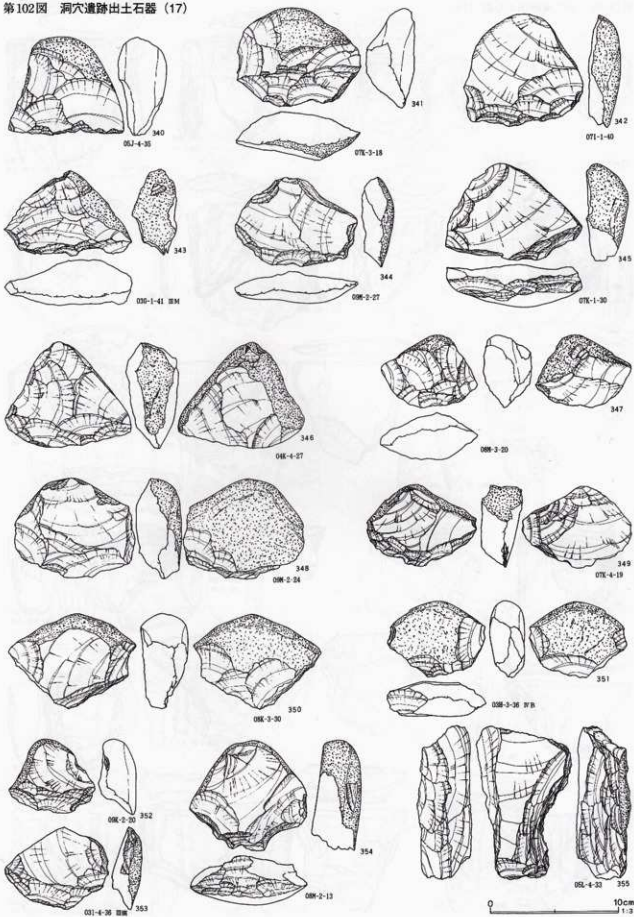
第100图 洞穴遺跡出土石器 (15)



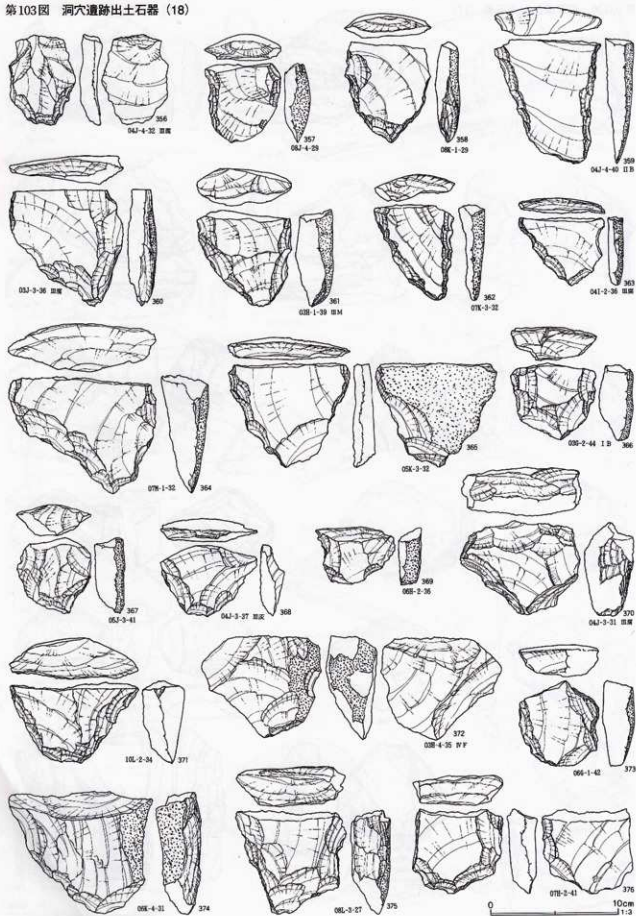
第101圖 洞穴遺跡出土石器 (16)



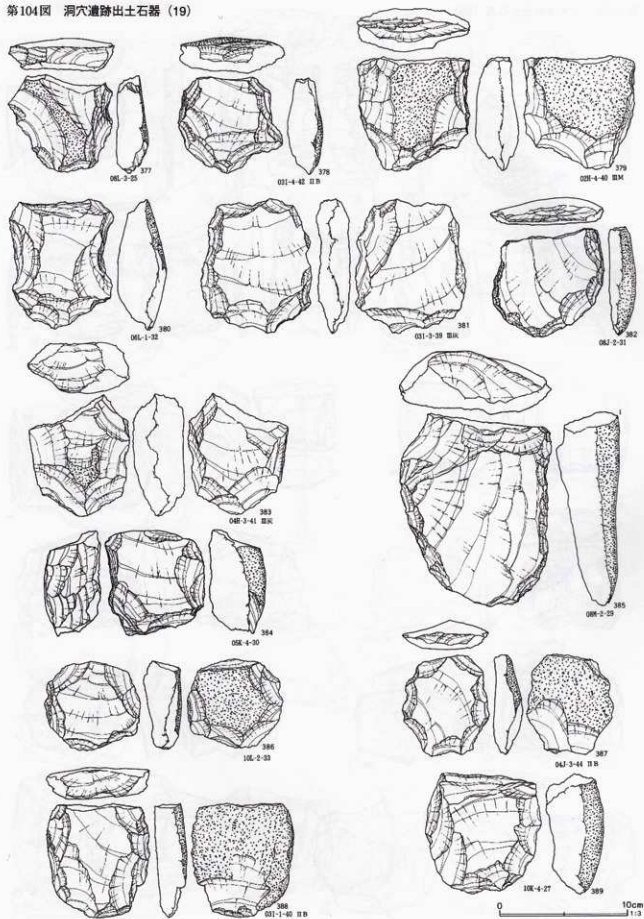
第102图 洞穴遺跡出土石器(17)



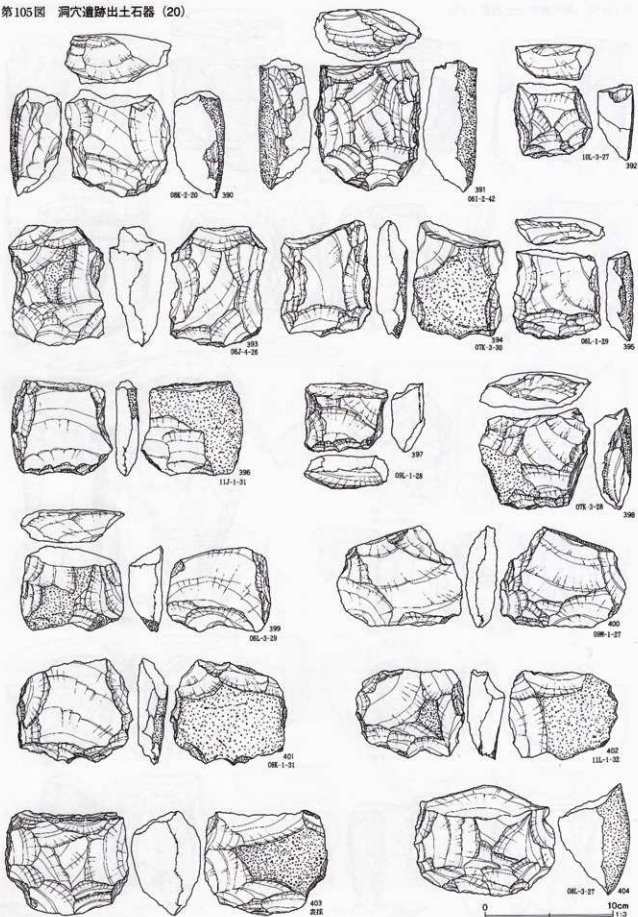
第103图 洞穴遺跡出土石器 (18)



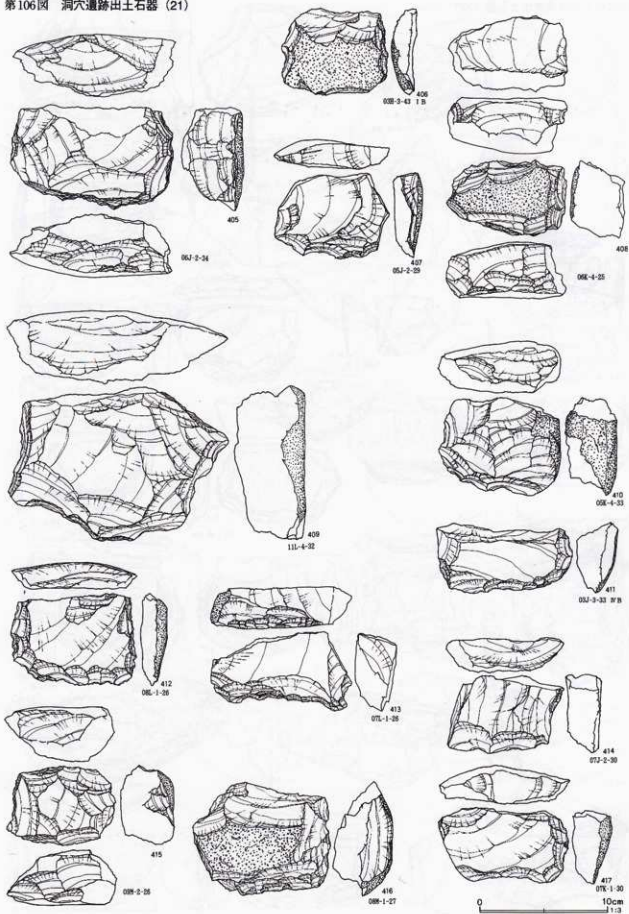
第104图 洞穴遺跡出土石器 (19)



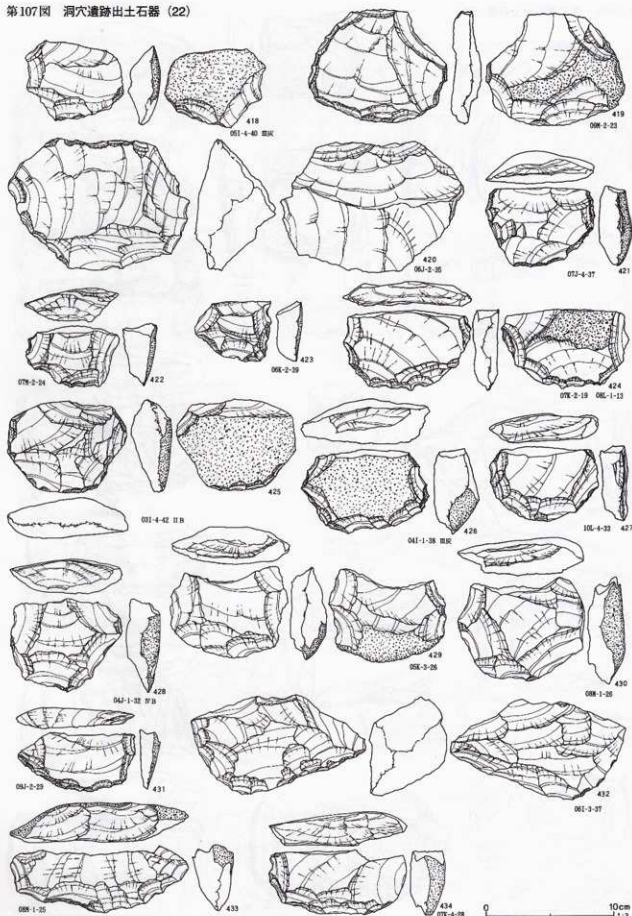
第105图 洞穴遺跡出土石器 (20)



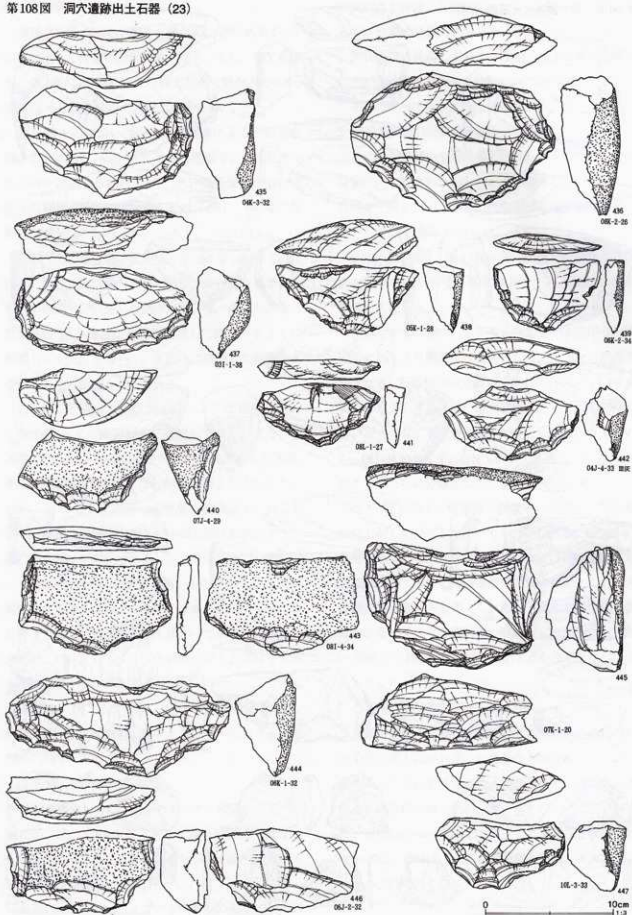
第106图 洞穴遺跡出土石器(21)



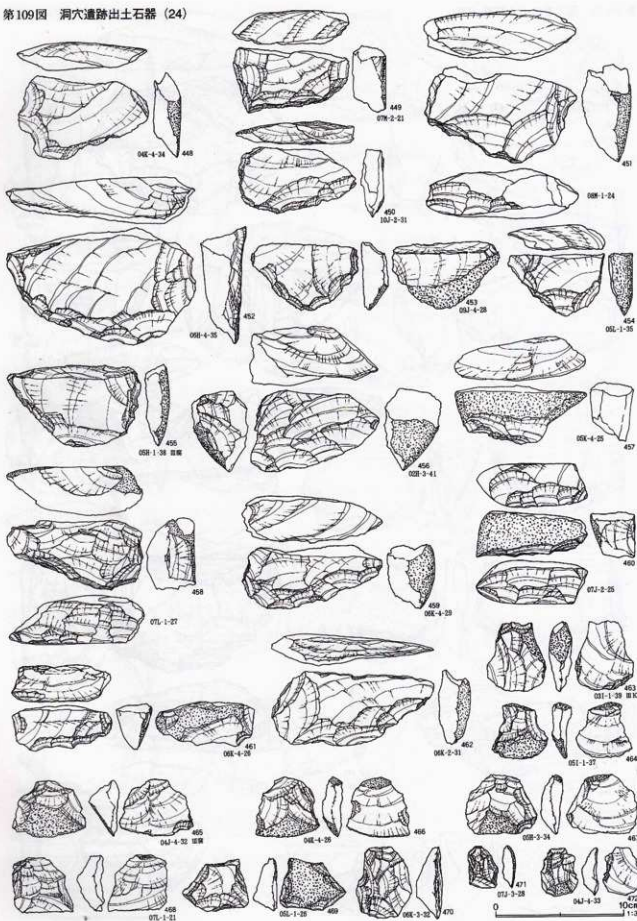
第107图 洞穴遗址出土石器 (22)



第108圖 洞穴遺跡出土石器 (23)



第109图 洞穴遺跡出土石器 (24)



位でも発見している。

選択された素材は、礫塊と剥片の二者があるが、3 C種に比して後者の割合が多くなる。また、加工形態も、基本的には411のような横刃型が大勢を占めるが、359のような縦型使用も同種より例が多い。

3 C種とのちがいは握り部に剥離による平坦面を残すことにある。平坦面は、素材の段階でこれに見つかったものを選択する場合(443)と、機能部を作りだす途上の荒削り段階で追加するもの(438)、すべての最終に打割を行うもの(364)があり、一定しない。

このうち、最後者は破損品と見なせないわけではない。しかし、石器類の接合の結果、この種と目されるものが他類へと成長した例はない。唯一接合がなかった424は、握り背となる剥離に対して直交するように破損していた。もちろん、実際には破損した他類がまぎれている可能性も考えられる。

これらの形態は、縦型では362のような尖刃が多く、これが453などの横刃型へと連続していく。また、横刃型では412などの四角形から433の丸末をもった刃部、そして452のような偏刃などが典型例となるだろう。だが、389のような礫片の未製品や破損品ととれるものや、縦横型の狭間を加え、中間形態は無数にあり、確たる分離は不可能である。

一般に器厚は3 C種より薄いものが多いが、これに対応して刃部も同種より鋭い。また、加工の手数は3 C種より多く、重量の偏差も広がっている。出土高とあわせ、時代とともに、より機能に即した素材や形態を求めた姿がうかがえる。

石材は、359・425・433・439が砂岩、360が粘板岩、440が凝灰岩である他はホルンフェルスであり、掲載同種の94%を占める。

3 E種 (第109図463~472)

外形や重量ともに小振りのもので、礫器的用途に不適だが、572のようなミニチュア品とは認められないものを一括した。16点を分離したが、平面・垂直とも分布に特段の傾向は見られない。

典型例は463から467までの末広りの形態で、素材

の鋭利面を直線から弧状にいかし、頭部のみを加工するのが往時の意図と考えられる。これは、160などの三角状削器に共通しており、機能的には2類と分類した方がよかったのかもしれない。

石材はすべてホルンフェルスである。

3 F種 (第110図473~485)

その他、石器の全形は推しはかれるものの、上記の分類にあてはまらないものをこの種として一括した。17点を分離したが、うち13点を図示した。もちろん、統一した出土傾向はない。

このうち、473~482は握り背に互慮した剥離や自然面を設けただけで、481の外形など、基本的には3 D種と大差ない。

また、483・484は、えぐり込みをもつ末広りの横刃型に加工され機能部は直刃となる。一方を自然面で残すなど、石器製作の意図が一致している。出土高は、双方とも条痕文系土器の分布範囲にある。形態的特徴は、背丸の3 C種である327や308と似てないでもないが、握り背をもたず、石材も砂岩で共通しているため、あえてこちらに分離した。

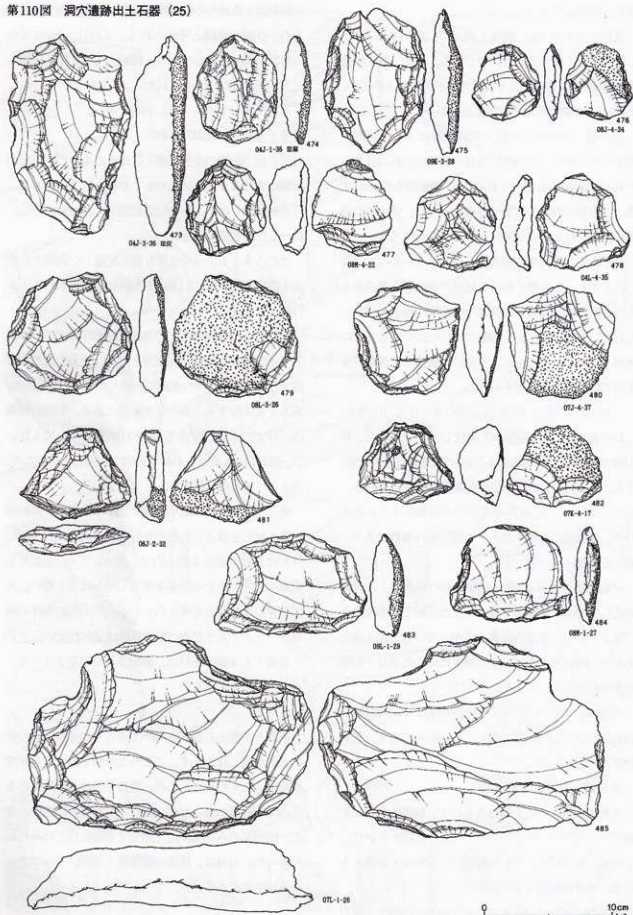
そして、485は、横刃型の機能部の対辺に、突出部の作りだしを目ざしたえぐりが加えられる。その結果、外形は石匙に似たものとなる。だが、1.8kgをこえる重量は、とてもその用途を意図したとは思えない。大型礫片の未製品とも考えられるが、突出部に製作の放棄をうながすような打割の痕跡は見られない。

掲載した本種の石材は、前記2点をのぞきすべてホルンフェルスである。

3 G種

剥離や形態から礫器と半断できるものの、破損のため全形が推しはかれず、こまかな分類を施すことができなかったものをまとめた。礫器全体の9%にあたる61点が細分類に余ったが、図に示したものはない。また、破損品のみが集中して出土する地区などはみられなかった。石材は、既述の礫器群と同様、ホルンフェルスが主体である。

第110圖 洞穴遺跡出土石器 (25)



4類 (第111図486~490)

打製石斧をこの類にあてたが、主として早期後葉に製作されたと考えられる3A種と見分けにくい。分離の基準は、典型的な形態や、側縁に着柄のための刃潰しが行われているものなどを選びだし、出土位置を勘案しつつ分離した。

それでもなお、486・489は条痕文系土器と同位で出土し、490は早前期の狭間だが、灰層から出土するなど、年代的な帰属に矛盾をはらんでいる。いずれにせよ、洞穴の利用法に起因するのか、前・中期、とくに前期後半以降の秩父域の遺跡としては、残された土器の量に比して打製石斧が少ない。

これらは、6点を分類したが、うち5点が6列までの洞穴と岩庇内で出土している。図に示したなかでは、486~488が頭部と刃部の幅が大きく異なる短冊形に近い楕円形、489・490がその差が大きい楕形となる。489は適当な緑色凝灰岩の礫塊を素材としているが、他の4点はホルンフェルスの大礫から採取した薄い一次剥片を利用している。また、490は着柄のため、両側縁が潰されている。

5類 (第111図491)

石器全面に研磨がおよぶ磨製石斧を本類としたが、491の1点が出土したにすぎない。前期中葉に典型的な緑色凝灰岩製の乳棒状磨製石斧で、側縁は、装着時のバランスを配慮して左右非対称に形づくられている。また、頭部の剥離は、刃部機能時の反動ではなく、露出した先端部を独自の用途として使用したために生じたと考えられる。

6類 (第111図492・493)

早期前葉の後半に隆盛するスタンプ形石器を念頭に分類を設定した。2点のみの出土であり、うち1点は未使用品である。492の出土土高は、多くが試掘溝にかかったため目安となる土器が少ないが、おおよそ条痕文系と押型文系土器出土高のあいだで検出した。また、493は、周辺で土器は出土しなかったが、7Hグリップ

でも最下層に位置していた。

492は、閃緑岩を素材とし、機能面には敲打による剥離後の潰れが、またこれに接した側面には衝撃時の剥離が認められる。これに対し、493は未使用品で、複数方向からの加撃によってつくりだされた機能部が礫塊軸と直交するような角度であるため、この類とした。だが、この遺跡で出土した食物粉砕具としてはめづらしいホルンフェルスを素材とするなど、他類を誤認した可能性もある。

7類 (第111図494~第118図570)

スタンプ形石器をのぞく食物粉砕加工具とその周辺を、この類として一括した。いわゆる磨石、凹石、敲石、台石・石皿が出土しているが、それぞれを細種として分離している。もちろん、他遺跡同様、これらの機能が複合・転用されるものも多く、その場合は後出する分類を優先して帰属させた。

出土量は、総計で132点を検出しているが、全体では洞穴内が12%、前庭部が88%と、双方の面積や包含層の体積差を配慮しても、なおもって前庭部の優勢が指摘できる。しかし、垂直方向では、包含層の全体に散在しており、特段の傾向は認められない。

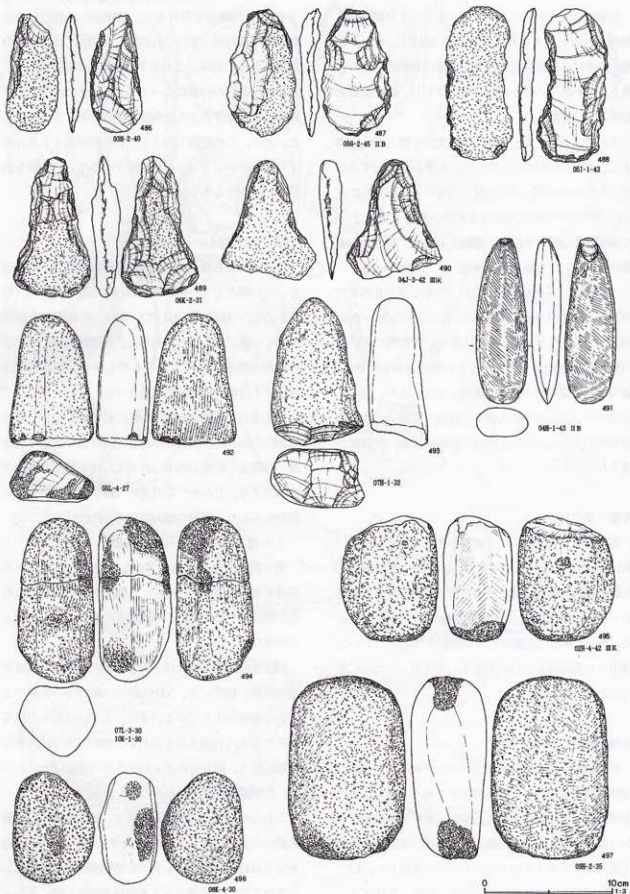
7A種 (第111図494~第114図530)

磨り痕をもつ食物加工具のなかで、7B種以下の用途を兼ねないもの79点をこの種とした。出土位の高低や層位のちがいで、形態などの変化を見ることができなかった。

図示した資料では、ほとんどに敲打か研磨の側縁使用の痕跡が観察でき、500や506では敲打時の衝撃でこまかな剥離が生じている。また、大半は自然の川原石をそのままに利用したものだが、502や526では大きな剥離が残る。敲石をめざしたような刃部化はしておらず、形態調整を意図したものとする。

これらの石材は閃緑岩が大半で、結晶片岩や緑色凝灰岩が主体の凹石・敲石類と大きなちがいをみせる。おなじ石材は、不覚にも大半を発掘調査現場に廃棄してきた7D類の候補となる大型扁平川原石類に多かつ

第111图 洞穴遗址出土石器(26)



第112图 洞穴遺跡出土石器 (27)

